JICA 教師海外研修　学習指導案・授業実践報告書

【実践者】

氏名	池亀　元喜	学校名	新潟県 新潟県立佐渡総合高等学校
担当教科等	農業「農業と環境」	対象学年（人数）	２年　農産・加工系列（24 名）
実践年月日もしくは期間（時数）		令和元年 11 月（５時間）	

【実践概要】

1. 実践する教科・領域

農業・「農業と環境」

2. 単元(活動)名

発展途上国のために私たちができることや自己の在り方、生き方について考える

3. 授業テーマ（タイトル）と単元目標

⑴　授業テーマ

発展途上国の現状と課題を知り、私たちにできることや自己の在り方、生き方について考える

⑵　単元目標

ザンビア（発展途上国）の現状を知り、農業の見方・考え方を働かせ、私たちに何ができるか、自己の在り方、生き方を考える

⑶　関連する学習指導要領上の目標

教科農業の目標は、農業に関する課題を発見し、自分自身や社会のものとして解決することの重要性を主体的な態度で受けとめ、今まで身に付けてきた知識と技術を活用して合理的に思考・判断し、倫理観をもって解決を図る創造的な能力と実践的な態度を育成することである。農業の分野においても情報化やグローバル化が急速に進行しており、多岐にわたる課題が生じている。それらの課題を解決するためには、確かな知識と技術に裏付けされた思考力や判断力、創造力や実践力が必要であると同時に、職業人としての規範意識に基づく倫理観が必要となる。持続的かつ安定的に農業及び社会が発展することに寄与する人材を育成することは、農業教育に携わる私達の責務である。

4.　単元の評価規準		
	①知識及び技能	・　ザンビアの現状（ストリートキッズや環境の変化）を理解する。 ・　ネリカ米の播種ができる。
	②思考力、判断力、表現力等	・　ザンビアのストリートキッズや環境の変化を理解し、農業や環境について学ぶ高校生として、何ができるか、自己の在り方、生き方を考えることができる。
	③学びに向かう力、人間性等	・　社会の一員であることを自覚し、よりよい社会の構築について考えることができる。

5.　単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由】 ザンビアの現状を理解し、日々、農業や環境について学習している高校生として、「日本（先進国）で生活している私たちに何ができるのか」を考えてほしい。また、将来にわたり、同様の視点で生活を送ってほしいと考える。 【単元の意義】 農業や環境について学ぶ高校生として私たちにできることは何か、私たちの役割、自己の在り方、生き方とは何かを考えてほしい。

【児童／生徒観】

本校は、２年生から選択した系列に係わる科目を履修することとなり、「農業」や「環境」、「食品」に関して学んでいる。今までの生活の中で、国際社会について考える機会が少なく、海外への関心もあまりもっていない。また、多様な生徒が在籍している。

【指導観】

授業者が教師海外研修においてザンビアで撮影したビクトリアの滝やストリートキッズの写真を投影し、ザンビアの現状と課題を理解させ、農業や環境について学ぶ高校生に何ができるかを考えさせたい。また、私たちにできること、自己の在り方、生き方をグループでまとめ、発表させる。そして、アフリカで栽培されているコメ「ネリカ米」を実際に播種し、アフリカを少しでも身近に感じてもらいたい。

6. 単元計画（全　5　時間）

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	ザンビアの現状と文化、課題を知る①。	ザンビアの現状や文化を知る。	ザンビアの現状（首都内での格差、首都と農村部の格差）や文化（食文化、食生活）、環境問題に関する写真を見る。	授業者が教師海外研修で撮影した写真
2	ザンビアの現状と文化、課題を知る②。	ザンビアの現状や文化を知る。	ザンビアの現状（首都内での格差、首都と農村部の格差）や文化（食文化、食生活）、環境問題に関する写真を見る。	授業者が教師海外研修で撮影した写真

都市部と農村部の違い

食事

孤児院の子どもたち

学校に通っている子どもたち

首都のショッピングモールと
その近くにいるストリートキッズ

水量が例年に比べ少ないビクトリアの滝

3	授業者が国際社会に興味をもったきっかけを知る。 	授業者が国際協力に興味をもつきっかけとなったテレビ番組「世界がもし100人の村だったら」を視聴し、他国の現状を理解する。 ゴミ山で働く12歳の少女、フィリピンの「マニカ」について	「世界がもし100人の村だったら」のDVDを視聴し、フィリピンの現状を理解する。DVD内の台詞や情景など、要点ごとに設定された設問に回答する。最後に感想を記入する。	テレビ番組「世界がもし100人の村だったら」のDVD
4	ザンビアの食文化に触れる。 授業者が研修で撮影したザンビアの主食「シマ」の写真	ザンビアの主食であるシマを調理・試食を通して、コメ以外の主食文化を知る。	ザンビアの主食である「シマ」を製造・試食し、日本の主食であるコメとの違いを考える。	授業者が事前に準備したコーンフラワー
5	ザンビアの現状（ストリートキッズや環境）について理解し、私たちに何ができるか、自己の在り方、生き方を考える。そして、ネリカ米の栽培に挑戦する。	農業や環境について学ぶ高校生の視点から、自分たちにできることは何か、自己の在り方を考え、発表し合う。また、アフリカのために開発された「ネリカ米」を播種し、国際協力の意識を醸成する。	ザンビアの現状を理解し、私達にできること、在り方について付箋に書き、グループ内で発表し、まとめ、グループごとに発表し合う。また、国際協力の意識醸成のため、アフリカのために開発された「ネリカ米」を播種する。	JICA 筑波センターよりいただいたネリカ米の種子

7. 本時の展開（５時間目）

本時のねらい

本単元で学んできたことを生かし、農業や環境を学ぶ高校生として何ができるか、自身の今後の在り方を考える。

過程 時間	教員の働きかけ・発問および 学習活動・指導形態	指導上の留意点 （支援）	資料 （教材）
導入 （7分）	授業者が教師海外研修においてザンビアで撮影した写真「ビクトリアの滝」や「ストリートキッズ」の写真を投影し、ザンビアの課題を理解する。	写真を数枚と限定して、課題を理解しやすいようにする。	授業者が教師海外研修にて撮影した写真

展開１ （15 分）	ザンビアの課題から、農業や環境について学ぶ私達にとって、何ができるか、私達の在り方について考えさせ、付箋に書かせる。そして、グループ内で発表させ、まとめさせる。	ザンビアの課題から「私達はどうしたらよいか」など、身近なところから考えさせる。 また、「何ができるか」は、実現が難しくてもよいということを指導する。	付箋と模造紙 発表用補助資料
展開２ （15 分）	グループで出た考えをまとめ、グループごとに発表し合う。	発表用原稿を配付し、発表しやすいようにする。	発表用補助資料
まとめ （13 分）	アフリカのために開発されたネリカ米を播種する。	１人１鉢５粒ずつ播種する。 付箋に名前を書かせ、鉢に貼らせる。	ネリカ米の種子 付箋
	私たちが「考えること」が重要であること、今後も継続して考えていかなければならない地球の課題であるということを話し、本時の振り返りを個々で行わせる。	本授業を受けて、感じたこと、今後意識していきたいことを自由に書いてよいと促す。	振り返り資料

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

ザンビアの現状を理解し、私達にできること、在り方について考え、付箋に複数の意見を書くことができる。また、ネリカ米の播種を丁寧且つスムーズに行い、発芽させる。

本単元の振り返りより、今後、「よりよい社会の構築について考えること」ができているかを評価する。

9. 学習方法及び外部との連携

授業実践参観者：佐渡市立新穂中学校教諭 小黒 淳一 様（にいがた NGO ネットワーク理事
国際教育研修会 RING 主宰）

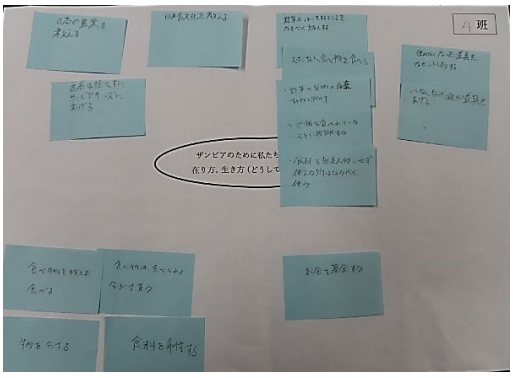
小黒教諭より、授業実践後の振り返りにも参加していただき、改善点、アドバイスをご指導いただいた。

授業教材（ネリカ米の種子）の提供：JICA 筑波センター研修業務課　西岡　美紀　様

10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

学校内での、私の授業実践を公開授業とし、10 名程度の教職員から参観をいただいた。また、JICA 教師海外研修について興味をもってくれた同僚からは、「来年度、私も参加してみたい」という声をいただいている。令和元年 11 月 23 日（土）に「にいがた NGO ネットワーク・新潟研国際交流協会」主催の「今、そして未来をつくる地球市民へ　2019 年度 SDGs 持続可能な社会作りセミナー　Let's コラボレーション教育×地域×SDGs」に参加し、県内教育公務員や地元農家、地元中学生など、多種多様な方々と「国際理解」についてディスカッションした。

【自己評価】

11. 苦労した点	どのような授業にすれば、生徒が興味・関心をもって授業に参加してくれるかを考え、悩んだ。私が海外研修で撮影した写真や動画を使用したり、実際に、ザンビアの主食を製造して、試食をしたりするなど、教科「農業」の中で、できることを実践した。また、普段は、日本の農業や環境について学ぶ高校生にとって、「いきなり、なぜ、国際社会？」とならないように、私自身が国際社会に興味をもったきっかけを１時間かけて生徒に伝えた。しかし、残念ながら、多くの生徒が、「遠い国の問題」として、身近にとらえてくれなかったように感じた。
12. 改善点	事後アンケート等により、ザンビアの課題や現状を生徒がどこまで正確に理解しているか、それをどのくらい自分ごととして考えているかを定量的に計りたい。そして、授業で取り上げるザンビアの課題を１つに絞って、私たちができること、私たちの今後の在り方について考えさせたい。
13. 成果が出た点	ザンビアの課題や現状を理解して、「私たちができること、私たちの今後の在り方はどのようにあるべきか」という、考えなければならないことがたくさんある中で、多くの生徒が、自分の意見を出し、発表を行ってくれた。また、具体的に「リサイクルをしていきたい」や「食品ロスを減らしていきたい」、「国際理解教育を通して学んだことを多くの人に伝えていきたい」など、私の想定通りの回答をしてくれた生徒が多くいた。生徒が考えてくれた「私たちができること、今後の在り方」を来年度の授業に生かしていきたいと考えている。
14. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	○ できることの意見を班で出し合い、模造紙に貼り、まとめたもの（抜粋）  ○ 発表の様子 ○ 本単元を終えての生徒の感想（抜粋） ・ 生徒１ 「今後、私は自分がいらなくなった物や、いらなくなった服をきふすることや、ボランティアに参加したり、青少年みたいな団体に参加するなどしたりしたいです。募金なども行えるようなら積極的に参加したいです。」 ・ 生徒２ 「食べ物が口にできていること、家族がいること、学校に通えていること、当たり前のことに感謝して生活していきたい。」 ・ 生徒３ 「おいしい食べ物を食べられていることに感謝していきたいと思いました。貧しい人のために、今自分ができることを考え、行動に生かしていきたいと思いました。食べ物、水などをそまつにしないようにしたい。」

○　本単元実施前と実施後のアンケート結果

	実施前（n＝24人）		実施後（n＝23人）	
	知りたい	知らなくてよい	知りたい	知らなくてよい
Ｑ１　日本以外の国について・・・・	15人	9人	16人	7人
	思う	思わない	思う	思わない
Ｑ２　日本は恵まれている国だと・・・	23人	1人	23	0人
	ある	ない	ある	ない
Ｑ３　国際社会や国際協力に興味が・・・	6人	18人	11人	12人

○　発芽したネリカ米

15.　授業者による自由記述

孤児院の子どもたちやコンパウンドで生活する子どもたち、ストリートキッズは、私達教師海外研修者一同に屈託のない笑顔を見せてくれた。そして、握手したときの手の感触、温度、ストリートキッズ達の体臭や口臭（シンナーの臭い）を忘れることができない。

ザンビアでの 10 日間の研修で、自らの知見を広げることができ、非常に充実した有意義な研修となった。私にとって、初めての外国で、日本との違いを多く感じた。ザンビアの食生活や経済、天候、人間性および格差など。見たこと感じたことがすべて新鮮で、私の人生にとって、大きな分岐点となる研修であった。

青年海外協力隊としてザンビアで活躍する日本人と会い、話を聞く中で、国際協力や国際支援、国際理解について深く考えることになった。「物をあげるだけが、支援ではない。場合によっては、自立を妨げることになる」という言葉に、自分自身、迷いが生じた。しかし、ザンビアにいる日本人の皆様から、「支援には段階（ステージ）がある」ということ、そして、「個人に行うべき支援と大多数の人に行うべき支援は違う」という、腑に落ちる答えをいただき、教師として私が発展途上国のためにすべきことが明確となった。それは、農業教育を通じて国際支援、開発教育を実践するということである。青年海外協力隊員の皆様と同じように、自分の強みを生かして、国際支援・国際理解教育を実践していきたい。そして、日本の子ども達が、国際支援や国際協力に興味をもち、グローバルな視点で、今後の人生を送ってほしいと今、強く考えている。

帰国後に、授業実践の準備を始めたが、どうすれば生徒たちが国際社会に興味をもってくれるか、自分ごととして考えてくれるか、試行錯誤した。実際のところ、授業を受けた全生徒の興味関心を刺激することができなかったと感じている。日本とは、佐渡とは関係の無い「遠い国の問題・課題」で終わってしまったところがあった。もっと、「自分たちの足下からできること、すべきことを考える」という視点で授業実践するべきだったと痛感している。しかし、情報量や考えなければならないことが多い中で、生徒たちは良く考え、それをアウトプットしてくれた。２年生に授業を実践したので、来年度以降に生かしていきたいと感じている。

参考資料：DVD「フジテレビ 世界がもし 100 人の村だったらディレクターズエディション」2009 年５月